

山形県 県史だより

第1号

山形県総務部学事文書課分室 県史資料室

巻頭口絵に見る『山形県史』通史編



羽黒山五重塔



長谷堂合戦図屏風



紅花屏風



山形県新築の図錦絵



山形県庁 大正9年絵葉書



山形県庁 1951(昭和26)年ころ



山形県庁 1975(昭和50)年

「山形県 県史だより」の発行に寄せて

山形県総務部学事文書課長 大沼 勇

『山形県史』の編さん事業は、昭和三十二(一九五七)年度から平成十六(二〇〇四)年度までおよそ半世紀にわたって続けられ、この間、資料篇(編)二四巻、本篇六巻、通史編七巻、別編五巻の計四二巻が刊行されました。

現在は、当課分室(県史資料室)を村山総合支庁西庁舎に設置し、編さん事業の過程で調査・収集した書籍や複写資料・写真・フィルム・古文書・公文書などを保存・管理するとともに、新たな資料の受け入れと、県史に係わるレファレンス(相談・情報提供)を行っています。

最終刊行物の『山形県史 現代年表 別編』発刊から一〇年が経ちましたが、現在も、県史に関するお問合せをいただいております。また、激しく社会が変化する今日において、未来を切り開くために「歴史」の大切さが再認識される中で、記録資料の保存・管理・公開が重要視されています。

こうしたことから、この度、山形県の歴史に係る話題や、歴史を考える貴重な記録資料を紹介する「山形県 県史だより」を発行することにいたしました。

皆様には、ぜひご覧いただき、「山形県の歴史」に対して、より一層、関心をお持ちいただきますとともに、県史についての疑問や調べたいことなどがありましたら、お気軽に県史資料室へお問合せください。

所蔵史料紹介

高木秀明「公務日記」

山形・福島両県を結ぶ東北中央

自動車道の栗子トンネル（仮称）

が貫通し、三月二十二日に式典が行われました。東北最長となるこの道路トンネルは、南東北の活性化につながる期待されています。

この栗子山にトンネル（隧道）を掘るといふ近代化の取り組みは、

今から一三八年前の明治九（一八七六）年に始まります。統一山形県ができたこの年、県令（県知事）三島通庸は、四方の交通の便を良くして、産物の輸出入、東京への直結を進めるために、道路開削を重要政策の一つとしました。三島県政の道路開削は、二三カ所約三五〇キロメートル、橋梁は六五橋に及んでいます（『明治元年ヨリ十四年度マデノ工事調書』）。道路開削にあたり障害となつたのは、四方を囲む山々です。福島・宮城・秋田のいずれの県へも山脈が立ちふさがり、車の通行を可能にするに

はトンネル（隧道）掘削が欠かせず、栗子・刈安・磐根・関山のトンネル（隧道）の合計は約一・三キロメートルに達しています。

道路開削にあたり、明治九年、

三島県令は路線の調査を山形県官吏高木秀明に命じます。命を受けた高木は、案内人を伴い県内各地を探查して、道路開削が可能な路線を確定し、同十二年には土木課長に就任します。

この高木秀明の「公務日記」が県史資料室に保管されています。

平成に入り、当時の県史編さん室に寄贈されたものです。日誌は、明治九年九月六日から十二月二十八日までのもので、高木は着任以来の日々を路線調査、とりわけ栗子山の調査に費やしていたことが伺えます。山中で眠れぬ夜を過ごし、翌朝村人が届けてくれた岩魚と酒に、生きた心地を感じたことなど、難儀な調査を経て、ようやく奥羽の大山脈を切り抜く路線工事が確定していく様子が、記されています。



左：平成 26 年 3 月 23 日付 『山形新聞』

下：明治期の栗子隧道西口
（『山形県史』第四巻近現代編上）



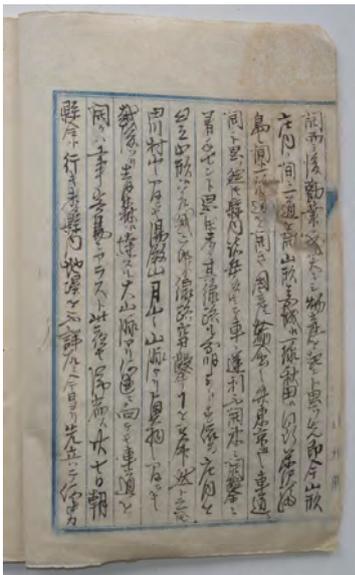
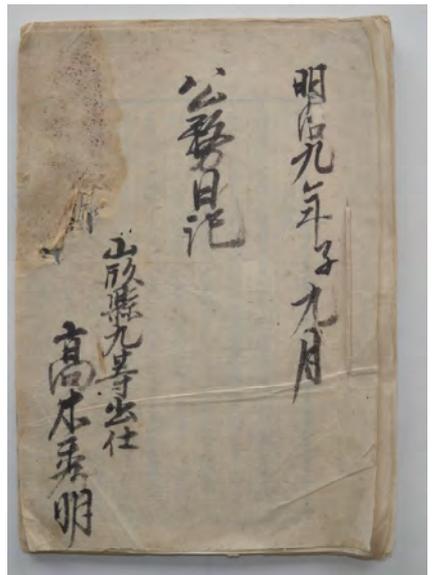
日記とともに頂いた履歴書の写しによれば、高木は、天保二（一八三一）年鹿児島上荒田村生まれで、島津斉彬に同行して江戸で洋学を学びます。その後、幕末には薩摩・大隈・日向三国実測図並びに地誌取調べを命じられ、各所を巡回します。そのため戊辰奥羽戦争出征も許されず、明治五年にようやく上京が許されます。東京では建築掛や営繕掛を勤め、同九年八月に鶴岡県、同九月に山形県への勤務が命じられます。同十四年には栗子隧道工事での功績に金百円を下賜されています。同十八年に福島県、同二十二年静岡県に配属され、同二十六年に退官し、同三十六年に死去しています。

（山内 励）

山形と福島を結ぶ

明治から平成に

受け継ぐ思い



明治九年子九月
公務日記

山形県九等出仕 高木秀明

日記

一、明治九年九月六日、鶴岡廃県後、山形県九等出仕命じられ、七日、三条公羽州御巡廻、青森県まで御着の由申し来たり、八日、三島山形県令には秋田まで差し越さる積り、九日朝雨、昼より県令には酒田まで出発、十九日朝、清川筋より三条公も鶴岡へ着、二十日滞在、二十一日晴、今朝六時半、三条公出立、県令にも同行、山形県へ差し越され候、同二十五日夜、県令には帰宿、翌二十六日夜、県令宿所へ行く、山岡・清水の両土も来る、この晩、県令言つ、このたび三県合併については、羽州之地未だ四運不通ゆえに、万事開かず、よって道路を開削し、四方運送の道を開き、しかして後、勸業を盛大にし物産を起こさんと思つ、先づ、即今山形・庄内之間に一通を開き、山形・宮城へ一線道を開き、国産輸入・出の弁（便）、東京への車通し、潤さんと思つ、然れども、県内諸岳多くして車の運利開かず、速やかに開削に着手せんと思へども、未だその線路も分明ならず、よって庄内を出立山形へ差し越し候節より、線路穿鑿のことを命じらる、然りと云へども田川・村山の間には、湯殿山・月山の山脈あり、奥羽の間には、越後より青森へ達する大山脈あり、いずれに向きても、車道を開くは工事容易にあらずと、この夜は帰宿す、二十七日朝、県令へ行き、未だ県内地景を不詳ゆえに、今日より先立つて、いづれか「以下次ページ」山道を越へ、山の模様を試さんと云々に、即ち、今日より行くべきとのことゆえ、昼より鶴岡を出立、松嶺に至る、この夜、戸長を呼びて、最上郡新庄へ越ゆる、山道の案内は一人、人足一人手配の事を托す、この夜少々雨降る

〔書き下し文〕

統計から見る山形県の歴史
幕末明治海外渡航者一覽

入国管理局の「日本人出国者数」によれば、平成二十四年の山形県の海外旅行者数は、計六万人を超え、外国との距離は確実に狭まっています。日本の近代化は、科学技術などの西欧文明の取り込みから始まりました。その取り込みに直接関係した幕末・明治期の海外渡航者の情報を網羅した資料が、『手塚晃編『幕末明治海外渡航者総覧』（全三巻、柏書房）です。この資料には、山形県出身者も九一（同一人物を除くと八九）名の情報が載っています。個別情報はすでに知られていますが、山形県全体を眺望して時代を探る好資料と言えます。

慶応三年を皮切りに、維新後の明治四・五年が多く、二十年代後半からは複数が続き、日露戦争を挟む三十年代がピークとなっています。渡航の目的では、医学系一八に続き、経済、人文系、軍事、工学系、法律、宗教関係が続いています。渡航先は、単独国ではアメリカ二一、ドイツ一九、イギリス九が多く、ヨーロッパ複数国一九、アメリカとヨーロッパが一五となつていきます。出身地は、明らか分では、米沢が最も多く、鶴岡がそれに続き、山形・酒田・上山・天童などが見られます。

同資料には、姓名・生年月日・出身教育機関・活動分野・組織における地位・渡航時所属機関・渡航時地位・渡航先名・渡航時期・帰国時期・渡航の目的・渡航形態・出身校名・留学先等・出身地・初勤務先ノ地位・専攻分野・帰国後勤務先地位・死亡年月日・顕著な業績・著書・出典ノ参考文献などが記されています。詳細はご覧ください。（山内 励）



右から酒井忠篤、二人目が坊城俊章、後列立ち姿の右から二人目が酒井忠宝（社団法人尚友倶楽部・西岡香織編『坊城俊章日記・記録集成』）

【ドイツに渡つた庄内藩主酒井兄弟】 戊辰戦争で政府軍と戦闘を交えた庄内藩では、明治元（一八六八）年、藩主酒井忠篤が廃され、弟の忠宝が家督を継ぐことになりました。その後、二度の転封命令で藩は揺れますが、同四年には廃藩置県を迎えます。この間、兄忠篤は西郷隆盛の計らいで兵学を修め、同五年には兵学修行のためドイツに留学します（渡航者一覽四〇番）。また、弟忠宝も翌六年、兄に続いてドイツに渡り法律学を学びます（同四二番）。一方、公家出身で、戦後処理の中核となり、明治三年に山形県知事となつた坊城俊章も、知事を退任した同四年に岩倉使節団に同行して、ドイツを訪れます。その坊城がドイツのベルリンで交わつた華族の子弟の中に、酒井兄弟の姿が見られます。

幕末明治海外渡航者一覧（山形県）

番号	姓名	渡航先	渡航時期	帰国時期	渡航の目的	出身地	帰国後勤務先地位
1	青山忠治	アメリカ イギリス	1902年5月	1903年	工学系	山形県東村山郡	通信技師
2	阿久津政吉	アメリカ	1885年	1890年	宗教関係	山形県天童	独立教会設立
3	阿部能文	アメリカ	1895年	1903年	宗教関係	山形県鶴岡	東北学院教授
4	五十嵐秀助	アメリカ アメリカ	1889年 1900年	1890年6月 1900年	工学系	山形県米沢	通信省技師
5	五十嵐与七	アメリカ	1905年6月	1913年5月	経済	山形県西田川郡	江木写真館専務取締役
6	池田成彬	アメリカ	1891年	1895年	財政・金融	山形県米沢	三井銀行四等手代
7	石川清	アメリカ アメリカ	1891年 1898年	1896年 1898年	経済	山形県鶴岡	井村兄弟商会仕入部長
8	板屋確太郎	アメリカ	1885年		法律	山形県南置賜郡 元籠町	東京専門学校講師
9	市川定吉	ドイツ	1912年	1916年	医学系	山形県飽海郡酒 田町	大阪市立桃山病院副院長
10	伊東祐彦	ドイツ	1901年4月	1904年5月	医学系	山形県米沢	京都帝国大学福岡医科 大学教授
11	伊藤清蔵	ドイツ	1902年	1906年	農学系	山形県西村山郡 河北町	盛岡高等農林学校教授
12	伊東忠太	清国、その他	1902年3月	1905年6月	工学系	山形県米沢	東京帝国大学工科大学 教授
13	犬塚勝太郎	アメリカ ヨーロッパ アメリカ ヨーロッパ	1896年6月 1910年6月	1898年2月 1910年11月	経済 (鉄道事業視察)	山形県鶴岡	通信省鉄道局長
14	今井新太郎	ドイツ	1906年	1909年	医学系	山形県	仙台に開業
15	今村信次郎	イギリス	1905年12月	1906年	軍事	山形県	海軍大尉
16	上杉勝賢・畠山潮平	アメリカ	1870年	1876年	人文系	山形県米沢	
17	上杉茂憲	イギリス	1872年1月	1873年12月29日	不明	山形県米沢	
18	内村達次郎	アメリカ	1907年2月	1907年8月	経済 (冷蔵機械視察)	山形県米沢	特許事務所開設
19	内村良蔵	アメリカ イギリス フラ ンス ドイツ ロシア	1871年12月23日	1873年	全般・外交交渉	山形県	文部省六等出仕
20	大場茂馬	ドイツ	1905年9月	1908年3月	法律	山形市	東京地方裁判所検事兼 司法省参事官
21	岡部為吉	アメリカ ドイツ	1907年	1911年	人文系	山形県田川郡富 沢村	広島高等師範学校講師
22	小田切延寿	イギリス	1897年	1899年	工学系	山形県米沢	海軍少機関士
23	小田切万寿之助	清国	1884年	1891年	人文系	山形県米沢	領事館書記生
24	櫻村清徳	ドイツ	1884年4月20日	1885年12月17日	医学系	山形県米沢	東京大学教授
25	鹿野清次郎	アメリカ イギリス	1906年	1911年12月	経済	山形県	東京高等商業学校教授
26	上泉徳弥	イギリス	1898年11月	1900年4月	軍事 (軍艦回航)	山形県米沢	海軍中佐
27	河合亀輔	アメリカ	1892年	1896年	宗教関係	出羽国上ノ山	台湾伝道に当たる
28	菊地東陽・菊地学治	アメリカ	1904年	1919年4月15日	経済	山形市七日町	オリエンタル写真工業株 式会社創立
29	菊池米太郎	ドイツ オーストリア イ ギリス	1903年5月	1905年12月	医学系	山形県米沢	回生病院医師(大阪)
30	日下部四郎太	ドイツ フランス イギリ ス	1907年5月3日	1911年1月	理学系 (数物系)	山形県東村山郡 金井村	東北帝国大学理科大学 教授
31	栗本東明	フランス ドイツ	1898年2月	1900年7月	医学系	山形県	第五高等学校教授
32	黒井悌次郎	イギリス イギリス ロシア	1890年4月 1900年1月 1906年2月	1891年4月 1901年12月 1908年7月	軍事	山形県米沢	海軍大尉
33	小池正直	ドイツ オーストリア	1888年 1897年	1889年12月 1898年	医学系	山形県鶴岡	陸軍軍医学校教官
34	小菅久徳	イギリス ドイツ	1906年	1908年	経済	山形県鶴岡	東京製絨株式会社工務 課長
35	小西重直	イギリス ドイツ	1901年9月	1905年5月	人文系	山形県米沢	広島高等師範学校教授
36	小林源蔵	アメリカ ヨーロッパ	1902年4月	1903年40日 (ママ)	経済 (鉄道視察)	山形県米沢市元 籠町	鉄道作業局主記課長
37	斎藤紀一	フランス ドイツ	1900年11月17日	1903年	医学系	山形県南村山郡	青山脳病院設立
38	斎藤十一郎	ドイツ オーストリア	1899年	1900年	法律	山形県東村山郡	東京控訴院部長
39	酒井勝軍	アメリカ	1898年	1902年	宗教関係	山形県上山町	東京唱歌学校設立
40	酒井忠篤	ドイツ	1872年	1879年	軍事	山形県鶴岡	陸軍中尉
41	酒井忠利	ロシア	1901年	1904年5月	軍事	出羽国長瀬	海軍少将
42	酒井忠宝	ドイツ	1873年2月	1879年6月	法律	山形県鶴岡	
43	佐藤丑次郎	イギリス ドイツ フラン ス	1908年11月	1912年6月	人文系	山形県西田川郡 鶴岡町	京都帝国大学法科大学 教授
44	佐藤鉄太郎	イギリス アメリカ	1899年	1901年	軍事	山形県鶴岡	海軍少佐海軍大学校教 官
45	佐野利器	アメリカ イギリス アメリカ ドイツ イタリア	1906年 1911年2月	1906年 1914年4月	工学系	山形県西置賜郡 荒砥町	東京帝国大学工科大学 助教授

幕末明治海外渡航者一覧（山形県）

番号	姓名	渡航先	渡航時期	帰国時期	渡航の目的	出身地	帰国後勤務先地位
46	新海竹太郎	フランス ドイツ	1900年	1902年	芸術	山形	太平洋画会彫刻部を指導
47	杉原成義	アメリカ	1902年6月	1905年9月	宗教関係	山形県上ノ山	札幌教会牧師
48	鈴木幾弥太	アメリカ ヨーロッパ	1908年3月	1909年9月	工学系 (鉄道事業視察)	山形県飽海郡中山村	鉄道院技師
49	鈴木朝資	ヨーロッパ	1909年	1910年	軍事	山形県鶴岡	陸軍大佐陸軍大学校教官
50	須藤憲三	ドイツ	1912年3月	1914年10月	医学系	山形県東置賜郡赤湯町	金沢医学専門学校教授
51	高木三郎	アメリカ アメリカ	1867年7月 1869年	1868年11月 1874年	軍事	山形県	アメリカに留弁務使館書記
52	高津清	アメリカ ドイツ	1908年5月	1909年	工学系	山形県	通信技師
53	高橋秀松	イギリス フランス ドイツ	1899年	1902年	医学系	山形県米沢	海軍省医務局第一課課僚
54	高橋養助	ドイツ	1907年7月24日	1910年7月25日	医学系	山形県米沢	順天堂病院助手
55	田中一貞	アメリカ	1901年	1904年	人文系	山形県鶴岡	慶応義塾大学教授
56	田中友治	ドイツ	1907年8月	1908年12月	医学系	山形県田川郡大山村	東京帝国大学医科大学講師
57	田村哲	アメリカ	1900年	1906年	人文系	山形県米沢	
58	丹波恒夫	アメリカ	1907年5月	1913年	経済	山形県酒田	横浜の大和商会入社
59	千坂高雅	フランス イタリア	1871年1月	1873年	農学系	山形県米沢	内務権少丞
60	中條精一郎	イギリス	1903年12月12日	1907年6月27日	工学系	山形県米沢	文部省建築課設計掛長
61	辻順治	イギリス	1910年	1910年	軍事	山形県鶴岡	陸軍軍楽隊員
62	登坂小三郎	アメリカ ヨーロッパ	1907年	1908年	経済 (鉄道事業視察)	山形県米沢	鉄道院仙台営業事務所長
63	鳥居春洋	ドイツ	1890年	1894年11月	医学系	山形	山龍堂病院副院長
64	中里重次	イギリス	1908年7月	1910年8月	軍事	山形県鶴岡	海軍中佐
65	長沢惟和	ドイツ	1872年4月	1873年8月	不明	庄内	
66	中鉢直綱	アメリカ	1906年9月	1909年	経済	山形県東村山郡天童町	東京麻布で中鉢写真館経営
67	服部敬次郎	アメリカ	1871年1月4日	1874年3月	工学系	山形県酒田	開拓使仮学校入学
68	埴繁弥太	スイス	1910年1月	1912年6月	医学系	山形県鶴岡	南満州鉄道大連医院皮膚科医長
69	羽太鋭治	ドイツ	1912年5月	1914年11月13日	医学系	山形県	東京神田に医院開業
70	林大八	ロシア	1910年12月	1919年	軍事	山形県鶴岡	参謀本部出仕
71	日野真澄	アメリカ	1897年	1901年	宗教関係	山形県東根	同志社神学校教授
72	平田東助	ドイツ イギリス ドイツ オーストリア ベルギー ロシア	1871年12月23日 1882年3月14日	1876年3月 1883年8月4日	法律	山形県米沢	内務省御用掛
73	深瀬周吉	ドイツ オーストリア	1909年10月	1912年12月	医学系	山形県北村山郡東根村	
74	深田康算	ドイツ フランス	1907年5月	1910年	人文系	山形県山形市	京都帝国大学文科大学教授
75	藤井健治郎	ドイツ	1905年9月	1907年10月	人文系	山形県田川郡狩川村	早稲田大学教授
76	保科孝一	イギリス フランス ドイツ	1911年7月	1913年12月	人文系	山形県米沢	東京高等師範学校教授
77	星野勇三	イギリス アメリカ ドイツ フランス	1903年	1907年3月	農学系	山形県田川郡手向	札幌農学校教授
78	本間義次郎	ドイツ	1902年8月	1904年10月	理学系 (数物学)	山形県酒田	
79	槇山栄次	ドイツ アメリカ	1905年	1908年4月	人文系	山形県米沢	文部省視学官兼東京女子高等師範学校教授
80	松平忠敬	イギリス	1872年1月	1877年3月	人文系	山形県米沢	
81	松原重栄	アメリカ	1884年	1895年	経済	羽前国天童	小名木川綿布会社支配人
82	三浦新七	ドイツ	1902年	1912年	経済	山形県	東京高等商業学校教授
83	宮城浩蔵	フランス	1876年	1880年6月28日	法律	山形県天童	司法省
84	矢尾板四郎	ドイツ	1910年7月	1913年10月	医学系	山形県北村山郡楯岡町	東京日本橋に開業
85	八鍬儀七郎	ドイツ イギリス アメリカ	1906年	1910年10月	農学系	山形県	東京帝国大学農科大学助教授
86	山下源太郎	イギリス	1896年10月	1899年7月	軍事 (造兵監督)	山形県米沢	海軍中佐
87	山田鉄蔵	ドイツ	1895年10月	1898年7月	医学系	山形県西置賜郡	東京で病院を開業
88	山内繁雄	アメリカ イギリス アメリカ	1904年 1911年	1910年 1913年	理学系 (生物系)	山形県酒田	東京高等師範学校教授
89	吉田熊次	ドイツ フランス	1904年	1907年8月	人文系	山形県置賜郡	東京女子高等師範学校教授

特別寄稿

県史編さんとその後の課題

山形大学名誉教授（元 山形県史編集委員会委員長）

横山 昭男

山形県の公文書及び重要な歴史史料の保存管理と公開の推進については、いろいろな形でこれまで何度も取り上げられてきました。その中でも大きな画期は、県が国の「公文書館法」の制定（一九八七年）を受け、庁内に「公文書館基本問題研究会」を設けて、山形県公文書館の計画書案を作成（一九九四年）したことです。しかし、この計画は、翌年の「山形県新総合発展計画」以降のプロジェクトに、政策課題として取り上げられるには至っていません。

そのころ、山形県史編さんも現代編の最中で、資料の収集や整理とともに、その基本的なものは各執筆者が共有して、通史編の叙述に当たることを確認しながら進めていました。特に県の重要政策を正しく伝えるためには、結論だけではなく、政策決定過程を示す公文書の具体的内容が必要で、県史編さんには期間も限られていましたが、資料の収集・整理に一定期間を取り、現代編上下二巻を執筆者三〇人と事務局が一体となってまとめた経験は忘れられません。それまで、県史の現代編として歴史的構成をもって叙述したものが他県に例が少なかったことから、編集上の苦勞も多かったように思います。長かった山形県史編さん事業は二〇〇四（平成十六）年度に予定通り終了しましたが、その後課題とされたのは、公文書及び重要な歴史史料の保存管理と公開のためのしくみづくりです。

国や自治体が公文書等を管理し、保存・利用を図る理由については、「公文書等の管理に関する法律」（二〇〇九年）第一条で、「公文書」は国民共有の知的資源であり、国民主権の理念にのっとり、主権者の主体的な利用が保障されるものであると述べられており、それに尽くされています。「公文書館」は、それを実現するための重要な施設です。

今、私たちは、国や自治体の財政難や人口減少問題に直面し、歴史や先人の知恵に学ぶ必要が求められています。NHKも今年に入り、一時間の特別番組を二回、江戸時代の名君として知られている米沢藩の上杉鷹山を話題としました。その主題は、その頃どこの藩にも見られた財政難、人口減少また農村荒廃をどうして克服したのか、ということですが、多くの諸藩で実施された改革政策の中でも、鷹山の改革に見る特徴の第一は、「対話」と「公開」の思想でした。当然、歴史的条件を考慮しなければなりません。これが現代にも通することは、現アメリカ大使の父に当たるアメリカ元大統領のケネディが、日本の最も尊敬する人物として鷹山をあげていたことから明らかです。今、山形県と米沢市がアメリカの大使を歓迎する準備を進めています。この機会に、公文書及び重要な歴史史料の保存管理と公開のしくみづくりがより一層進展することを期待したいものです。

小松満次郎氏「日記」

昭和二十年八月五日ヨリ日記ヲ付ケント志シ初メテ筆ヲ取り 略

九日 早朝ヨリ敵機八機宮キ縣ヨリ山形上空ヲ通過セリト思シニ返転シテ村山飛機場並に神町飛機場ヲ攻撃セリ ソレヨリ引続キ連続的二攻撃ヲ続行シテ多所(カ)ニ及ブ 多少負傷アリ 本日蘇国モ又満州朝鮮等ヲ攻撃セリト云フ

拾日 薄曇リ 午后ヨリ細雨時々アリ 午前五時警戒警報 同七時十分山形空襲警報發令 情報ハ山形中部地区ヲ通過セル敵機廿四機アリト爆音ヲ聞カズ 敵キハ 十キ程度トナリ日本海ニ進出セリ 空襲發令アリ 十一時二十分過 情報ハ酒田北方ニアル敵キ八新庄方向ヲ向ツヽアリ

十四時五十分ニ至リ 我力東北全帯二敵キ残ラズ退却セル模様ナルモ警戒ヲ要スト 十五時五分宮キ縣に空襲警報發令 敵キ六十キ西進中ナリ 福島縣地区警報發令 十五時十分過 十五時二十分山形縣地区空襲警報發令 敵キ六十キ内十四キ八新庄ヨリ南進 村山神町二飛機場ヲ爆撃セリ 状況不明ナルモ多少被害アル模様

〔原文〕

「空襲」記述と

新史料との出会い

昨年、『山形県史』第五巻近現代編下の太平洋戦争期の空襲記述について、『(一九四五年)八月十日に神町飛行場(東根市)、楯山飛行場(山形市)が空襲されて銃爆撃を受けた』とする日付は誤りか」との質問がありました。指摘があったのは、六月三十日の夜半にはB二十九を含む米軍機が酒田港に多数の機雷を投下し、終戦間近の八月十日には神町飛行場(東根市)、楯山飛行場(山形市)、真室川飛行場、升形滑空場(新庄市)、玉野原飛行場(尾花沢市)の各飛行場のほか豊里村(鮭川村)の松根油工場が空襲され銃爆撃を受けた。」という箇所です。

指摘箇所は、当時、東北軍管区司令部発表としても大きく報道されている(昭和二十年八月十一日付『山形新聞』)八月九日・十日の一連の空襲被害について、主な被

害箇所を列記したものです。『山形県警察史』下巻及び周辺自治体史などには、個々の空襲被害について詳述されていますが、『山形県史』では、内陸部の空襲被害を略述するに止めたものです。ですから、「八月十日」の箇所は、本来「八月九日・十日」と記すべきで、脱字と言えます。

真室川飛行場、升形滑空場などが空襲被害を受けたのは八月十日ですが、神町飛行場と楯山飛行場で空襲被害があったのは八月九日です。同所には十日にも敵機が飛来していますが、脱字によって、「十日」のみの空襲被害と受け取られる表現となってしまう。この点は真摯に受け止め、今後の課題としなければなりません。

ところで、これら戦時下の空襲については、多くの県民が不安と恐怖の中に置かれましたが、その記録は、それほど残っていません。今回、この「空襲」記述を検討する中で、山形市の小松雄次郎氏から、この時期の空襲を示す史料と

して、父満次郎氏の日記を見せていただくことになりました。満次郎氏は明治二年生まれで、残された軍隊手帳には、日清・日露の両戦争に出征したことが記されています。太平洋戦争時は、自宅で戦争の成り行きを見守っていました。日記は、八月五日に始まり、同十五日の終戦までは、日々の軍事動向が記録されています。空襲の不安が募る終戦間際に、少ない情報をもとに一市民が書き綴った貴重な戦争記録です。ここでは、その一部を紹介しますが、私たちの身近に眠るこれら貴重な記録が、新たな歴史の構築につながることを期待しています。(山内 励)

山形県 県史だより 第一号

平成二十六年五月三十一日発行

編集・発行

山形県総務部学事文書課分室

県史資料室

千九百一八五〇一

寒河江市大字西根字石川西三五五

村山総合支庁西庁舎

電話 〇三三七 八三 一一二五

FAX 〇三三七 八三 一一二六